

新国立劇場 2016/2017 シーズン演劇公演

[JAPAN MEETS…—現代劇の系譜をひもとく—]XII

怒りをこめてふり返れ

作◎ジョン・オズボーン

翻訳◎水谷八也

演出◎千葉哲也

2017年7月12日(水)～7月30日(日)

新国立劇場 小劇場

世界中に「怒れる若者たち」を生んだ歴史的問題作を新訳上演

わが国の演劇界に大きな影響を与えた海外戯曲を新訳で上演するシリーズ「JAPAN MEETS…—現代劇の系譜をひもとく—」第12弾として、ジョン・オズボーンの『怒りをこめてふり返れ』をお贈りします。

1956年ロンドン、それまで中産階級社会をウェルメイドに描く作品が主流だったイギリス演劇界に突如現れた本作。下層階級の主人公が、根強い階級格差や、すでに斜陽となった大英帝国への焦燥、不満、怒りを本音でぶちまける姿が観客に衝撃を与え、「怒れる若者たち」の名で世界中に社会現象が巻き起こり、その後の若者文化に多大な影響をもたらす一大ムーブメントとなりました。

演出には、俳優としてのみならず演出家としても活躍する千葉哲也を、翻訳には同シリーズ『わが町』『るつぼ』の新訳を手がけた水谷八也を迎え、中村倫也、中村ゆり、浅利陽介ら魅力的な俳優陣が結集します。かつて世界を席捲したやり場のない“怒り”が、新たに現代の日本を照射します。ご期待ください。

【4月22日(土)チケット前売り開始 ☎ 新国立劇場ボックスオフィス 03-5352-9999】

写真・資料のご請求、取材のお問い合わせ

◎新国立劇場 制作部演劇 広報担当 藤沢 花

TEL: 03-5352-5738 / FAX: 03-5352-5709

◎新国立劇場 制作部演劇 制作担当 伊澤雅子、田中晶子



新国立劇場

http://www.nntt.jac.go.jp

◎あらすじ

英国中部の大きな町の、とある屋根裏部屋。貧しい下層階級に生まれたジミーは、妻アリソンと、同じ下層階級出身の友人クリフとの奇妙な三人の共同生活を続けていた。ジミーは、政治、宗教、あらゆる旧世代の価値観や秩序に激しい怒りをぶちまけ、さらに搾取により裕福で欺瞞に満ちた生活を送る憎むべき中産階級出身の妻アリソンにいらだち罵倒する。善良なクリフは、ジミーに怒りの矛先を向けられ憔悴したアリソンをやさしくなぐさめるのだった。

殺役とした生活が続いていたある日、アリソンの友人ヘレナが部屋を訪れる。窮状を見かねたヘレナは、アリソンの父親レッドファーン大佐に連絡を取り、説得されたアリソンは実家に戻るのだが……。

◎翻訳 水谷八也からのメッセージ

21世紀のジミー・ポーターへ

あの時、君はなぜあんなに怒っていたの？ 何をあんなに苛立っていたの？ 君のあの気持ちはどこから生まれて、どこに向けられていたのだろうか。今でも、あの熱はなんだったのか、考えてしまうことが時々ある。君がロンドンのロイヤル・コート劇場で手当たりしだいに悪態をつき、古典劇や上流階級主体の客間劇ばかりで停滞気味だったロンドンの演劇界にショックを与え始めたのが1956年5月8日のこと。

ジョン・オズボーンの『怒りをこめてふり返れ』は、台所のガスレンジが丸見えの古びたアパートの屋根裏部屋が舞台となっていることも、主人公である君の知的ではあっても上品とは言えない言葉づかいも、機関銃のように喋り散らす圧倒的な言葉の熱量も、時に観客を挑発するような態度も、異例づくめだった。大体、君自身、旧態然とした現実を鋭く糾弾してくせに、妙に律儀で義理堅い古風な一面も併せ持つ複雑な人間だ。自分でも持て余すほどの生命力を抱え込んだ不器用な男・ジミーを、当時の観客はどう扱えばよいのか戸惑ったと思う。本当に面倒くさい奴だ。でも、君の存在は意外と大きくて、『怒りをこめてふり返れ』以後出てくる若い作家たちは、怒ってしようがいが、「怒れる若者たち」と呼ばれることになってしまった。

1957年、君の熱は日本にも伝わり、日本橋の洋書屋でこの戯曲を立ち読みしていた当時演出家にもなっていなかった木村光一は、冒頭の場面を目にしただけで魅了され、翻訳に取り組む。『怒りをこめてふり返れ』は1959年5月に文学座のアトリエ公演として上演され、夏には演劇雑誌『悲劇喜劇』が「怒れる若き世代」という特集を組み、秋には雑誌『文学界』が「怒れる若者たち」と題して、石原慎太郎、江藤淳、浅利慶太、大江健三郎らの熱い議論を掲載している。君の怒りの熱はそれほど高かったということだ。

それから約60年たった今、世界には怒るべきことが明確に増え続けているように思う。その多くが直接〈生命〉に関わることだ。60年前も21世紀になってしまった今も、「生」の問題は何一つ

解決されていない。むしろ状況は刻々と深刻になってきてるんじゃないだろうか。だから、厄介者かもしれないけれど、君のあの怒りの中を覗いてみれば、君が過去の人ではないことがわかれると思う。やり場のない怒りや苛立ちが古びもせず、今でも熱を持ち続けていることがわかるんじゃないだろうか。だから、もう一度、みんな、君の熱に当てられてもいい頃だと思う。いや、むしろ、当てられたいかな。だから、応援するよ。

◎演出 千葉哲也からのメッセージ

人と人が「関わり」を持つ

この時人は様々な感覚を手に入れる

一般的に使われる「喜怒哀楽」

例えば「愛」という感覚を「喜怒哀楽」で分解してみても

「愛故の喜び」

「愛故の怒り」

「愛故の悲しみ」

「愛故の楽しみ」

言葉で書けばたった4通りでシンプルである

しかし人はそんなにシンプルなのだろうか

「愛を手に入れた喜びと同時に、どうしようもない怒りにかられ、

そして楽しければ楽しい程、深い悲しみに捉われる・・・」

4通りどころか無限の可能性がありはしないか

シンプルに生きたいがシンプルには生きられないのではないだろうか

人は自分も他者もコントロールしているつもりで出来てはいないのではないだろうか

多分、生きる事は「 $1+1=2$ 」にはならないのである

いや、なつてはいけないのではないだろうか

だからこそ、「無感覚」や「無感動」にならずに「関わり」を持つとうとするのではないだろうか

前を向き、時にはふりかえり・・・コントロール出来ない自分や他者と、

コントロールできない「関わり」を持って・・・

コントロール出来ない「喜怒哀楽」を抱え込んで・・・

自棄にならず無限の可能性に立ち向かい・・・そして覚悟を持って生きていく

『怒りをこめてふり返れ』、この戯曲の中には宝石箱のように、

様々なコントロール出来ない「喜怒哀楽」に満ちている

それを丁寧に、時には荒々しく乱暴に、残酷に愛を持って・・・「 $1+1=2$ 」にならない様に

カンパニー全員が「関わり」の中突き進みそして、「関わり」を持ってふりかえる

そんな作品になればと願う。

◎プロフィール

作◎ ジョン・オズボーン (John OSBORNE)

1929年、南ロンドンの労働者階級の家生まれる。デヴォン州のベルモント・カレッジを出て、19歳から田舎回りの劇団で俳優生活に入る。50年に処女戯曲が舞台化。56年『怒りをこめてふり返れ』が評判になり社会現象となる。同作を観て衝撃を受けたサー・ローレンス・オリヴィエから書き下ろしを依頼された『エンターテイナー』は、興行的にも成功をおさめた。その後も、『ポール・スリッキーの世界』『ルター』『イングランドのための劇』『認めがたき証言』『わたしのための愛国者』『支払われた負債』など精力的に執筆。ほかにもテレビドラマやシナリオを手掛け、晩年には自伝を出版した。94年没。

翻訳◎ 水谷八也 (みずたに・はちや)



学習院大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。現在、早稲田大学文化構想学部教授(文芸・ジャーナリズム論系)。翻訳書に、ソーントン・ワイルダー『危機一髪』『結婚仲介人』、アリエール・ドーフマン『谷間の女たち』『世界で最も乾いた土地』など。新国立劇場ではドーフマン『THE OTHER SIDE／線の向こう側』、ワイルダー『わが町』、アーサー・ミラー『るつぼ』がある。

演出◎ 千葉哲也 (ちば・てつや)



1987年、演劇企画集団「THE・ガジラ」旗揚げから参加。俳優のみならず演出家としての活躍もめざましく、2006年『スラブ・ボーイズ』で初演出。同作品と、08年『広い世界のほとりに』および16年『いま、ここにある武器』『青』で、第14回、第16回および第24回読売演劇大賞 優秀演出家賞受賞。そのほかの演出作品に、『ここからの距離』『キレイじゃなきゃいけないワケ』『BLUE／ORANGE』『アット・ホーム・アット・ザ・ズー』『桜の園』『K2』『ノイズズ・オフ』『袴垂れはどこだ』『寿歌』『トークトワミー！』『ART』などがある。新国立劇場では、『焼肉ドラゴン』『マニラ瑞穂記』『パーマ屋スマイル』をはじめ数多くの舞台に出演。15年、新国立劇場演劇研修所のシーンスタディで演出を担当。新国立劇場主催公演の演出は今回が初めてとなる。

ジミー・ポーター ◇ 中村倫也(なかむら・ともや)



2005年、映画『七人の弔い』でデビュー後、テレビ、映画、舞台など多くの作品に出演、成長著しい注目の若手俳優。初主演舞台『ヒストリーボーイズ』で、第22回読売演劇大賞優秀男優賞を受賞。近年の出演舞台に、『Vamp Bamboo burn〜ヴァン・バン・バーン〜』『ライチ☆光クラブ』『青年Kの矜持』など。新国立劇場は『わが町』に出演。その他の主な活動として、映画『愚行録』『日本で一番悪い奴ら』『星ガ丘ワンダーランド』、テレビドラマ『スーパーサラリーマン左江内氏』『闇金ウシジマくん Season3』『下町ロケット』など。待機作に映画『3月のライオン』『先生！』がある。

アリソン・ポーター ◇ 中村ゆり(なかむら・ゆり)



2007年『パッチギ！ LOVE&PEACE』のヒロインを演じ注目を集める。最近の作品に映画『黄金を抱いて翔べ』『百年の時計』『そして父になる』『ディア・ディア』『太陽の蓋』『破門 ふたりのヤクビョーガミ』、テレビドラマ『花子とアン』『硝子の葦』『探偵の探偵』『煙霞』『コウノドリ』『HOPE~期待ゼロの新入社員』『増山超能力師事務所』など。主な舞台に『1945』『錦繡』『浮標』『荒野に立つ』『国語の時間』『鱈々』など。新国立劇場は『焼肉ドラゴン』に出演。

クリフ・ルイス ◇ 浅利陽介(あさり・ようすけ)



1991年CMでデビュー。『レ・ミゼラブル(1997～98年)』のガブローシュ役のほか、テレビドラマ『あすか』『永遠の仔』『北条時宗』等で重要な役どころの少年時代を演じるなど、幼少の頃より活躍。主なテレビドラマに『コード・ブルー〜ドクターヘリ緊急救命』シリーズ、『DOCTORS3最強の名医』『妄想彼女』『真田丸』『相棒(season15～)』など。映画に『リアル鬼ごっこ5』『劇場版 猫侍』『幸福のアリバイ〜Picture〜』『ブルーハーツが聴こえる』など。主な舞台に『おのれナポレオン』『ロスト・イン・ヨンカーズ』『9days Queen 九日間の女王』『クレシダ』など。新国立劇場は『おどくみ』に出演。

ヘレナ・チャールズ ◇ 三津谷葉子(みつや・ようこ)



小学6年生の時、ホリプロタレントスカウトキャラバンに応募し、優秀賞受賞。『週刊ヤングジャンプ』をはじめ『ビッグコミックスピリッツ』、『週刊ヤングサンデー』、『週刊ヤングマガジン』の週刊青年漫画4誌すべての表紙を飾った数少ないひとりである。1999年にTVドラマ『P.S.元気です、俊平』で女優デビュー。2006年、映画『東京大学物語』で主演をつとめ注目を集める。その他の主な出演作品に『榎原かずお恐怖劇場 プレゼント』『紀子の食卓』『ひゃくはち』『愛の渦』『花宵道中』、主演作品『欲動』などがある。

レッドファーン大佐 ◇ 真那胡敬二(まなこ・けいじ)



オンシアター自由劇場の中心メンバーとして、『上海バンスキング』『もっと泣いてよフラッパー』『クスコ』『A列車』など、ほぼ全作品に出演。劇団解散後は舞台を中心に映像にも活躍の場を広げる。近年の主な出演作に『十二夜』『ソウル市民』『地獄のオルフェウス』『漂流劇ひょっこりひょうたん島』『メトロポリス』、まつもと市民芸術館『K. テンペスト』、コクーン歌舞伎『天日坊』『三人吉三』『四谷怪談』、座・高円寺『ジョルジュ』などがある。新国立劇場は『城』に出演。

◎マンスリー・プロジェクトについて

一人でも多くの方に気軽に劇場に足を運んでもらいたいと、“開かれた劇場”を目指す芸術監督の宮田慶子。その一環として、演劇講座あり、リーディングあり、トークショーありの、多彩な無料プログラムを用意し、その月々に関連した演劇公演に多角的にアプローチしています。

募集期間内に、新国立劇場ウェブサイト所定のフォーマットでのお申し込みが必要です。詳しくは、新国立劇場マンスリー・プロジェクトのウェブサイト(<http://www.nntt.jac.go.jp/play/monthly/>)か、情報センター(03-5351-3011(代))でご確認ください。

トークセッション「かさなる視点—日本戯曲の力—」

出 演: 谷 賢一、上村聡史、小川絵梨子、宮田慶子
日 時: 2017年5月13日(土)18:00～
会 場: 新国立劇場 小劇場
募集期間: 2月9日(木)～

『白蟻の巣』『城塞』『マリアの首』の演出家たちが結集。日本戯曲の魅力や、お互いの作品、演出について、思う存分意見を交わします。視点はどこへ向かい、何を感じたのか? 宮田監督を交えてシリーズを振り返ります。

リーディング公演 ウィリアム・サローヤン作品より

演 出: 宮田慶子
日 時: 2017年6月23日(金)18:30、25日(日)17:00
会 場: 新国立劇場 中劇場
募集期間: 未定

演劇公演『君が人生の時』にあわせて、ウィリアム・サローヤン作品の中から名作をリーディングにて上演いたします。

演劇講座「ジョン・オズボーンの魅力」

講 師: 谷岡健彦(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授)
日 時: 2017年7月15日(土)18:00
会 場: 新国立劇場 小劇場
募集期間: 4月6日(木)～

ジョン・オズボーンの『怒りをこめてふり返れ』が、戦後の英国演劇を刷新したとよく言われますが、その新しさはいまの観客には見えにくくなっています。本講座では、当時の演劇状況にふれつつ作品の魅力をお伝えします。

◎公演概要

【タイトル】 怒りをこめてふり返れ

【スタッフ】	作	ジョン・オズボーン	【キャスト】	中村倫也
	翻訳	水谷八也		中村ゆり
	演出	千葉哲也		浅利陽介
	美術	二村周作		三津谷葉子
	照明	笠原俊幸		真那胡敬二
	音響	藤平美保子		
	衣裳	高木阿友子		
	ヘアメイク	高村マドカ		
	演出助手	渡邊千穂		
	舞台監督	澁谷壽久		
	芸術監督	宮田慶子		
	主催	新国立劇場		

【会場】 新国立劇場 小劇場（京王新線 新宿駅より1駅、「初台駅」中央口直結）

【公演日程】 2017年7月12日（水）～7月30日（日）

2017年 7月	12 水	13 木	14 金	15 土	16 日	17 月祝	18 火	19 水	20 木	21 金	22 土	23 日	24 月	25 火	26 水	27 木	28 金	29 土	30 日
13:00			●	●	●	●	★	●		●	●	●		●	●		●	●	
18:30	●	●					休演			●				休演			●	●	

★＝終演後、シアタートークあり

【前売開始】 2017年4月22日（土）10:00～

【料金】 A席6,480円 B席3,240円（税込）

【チケット申し込み・お問い合わせ】

新国立劇場ボックスオフィス TEL: 03-5352-9999（10:00～18:00）

新国立劇場Webボックスオフィス <http://pia.jp/nntt/>

【その他チケット取り扱い】

チケットぴあ、イープラス、ローソンチケット ほか

* **2席1,620円** 公演当日10時よりボックスオフィス窓口で販売。1人1枚。電話予約不可。* **当日学生割引** 公演当日残席がある場合、2席を除く全ての席種について50%割引にて販売。要学生証。電話予約不可。* 新国立劇場では、高齢者割引（65歳以上5%）、障害者割引（20%）、学生割引（5%）、ジュニア割引（中学生以下20%）など各種の割引サービスをご用意しています。